
大善全集

恵比寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大善全集

【Nコード】

N1968Y

【作者名】

恵比寿

【あらすじ】

『城聖三ツ星学園』

そこはいたって普通の生徒から、素行が悪い生徒、ありとあらゆる部門のエリート、またさらに「その上」を集めた特殊な学園。

全国から生徒を集めているが、その選考基準がはつきりとしなないため「全国一受験対策ができない高校」とされている。

それでも多くの生徒が入りたがるのは、その学園の卒業生が後の

プロスポーツ選手、政治家、芸能人、医者、弁護士、画家etc
様々な分野で活躍している所が多大な影響を与えている。

その学園を舞台に

この物語は始まっていく

く序章く(前書き)

初小説につき見苦しい部分もありますが、暖かい目で見守ってください。

〈序章〉

カーテンの隙間から日差しが見えだしてきたころ

静かな部屋に目覚まし時計の音が響き渡る

「ん〜ねみい！！目覚まし時計ってこんなうっさかったかな？春休みの間使ってたからな」

その銀髪の寝癖頭をかきながら女ノ都^{めのと} 大善^{だいぜん}は学校に行く準備を始める。

大善が部屋から出て階段を降りていく途中、朝食のおいしそうな匂いが漂ってきた。

大善「おばさん、おはよっ！！今日も朝ごはんおいしそうだね！！」

と言い終わるか終わらないかのとき横から

「大ちゃん遅い！！今日から学校始まるんだよ！！ねえ！！始まるんだよ！！何そんな呑気にしてんのよ！！」

彼女は百津ももり
黒髪ストリートロングの活発な女子である。

大善「わかってるって！！ほら、急がば舞われた」

ももり「急がば廻れでしょ！！そついう文字的なツッコミはさせないで！！」

「朝っぱらから仲がいいのはわかるけど、早く食べないと遅刻するわよ」
と、ももりの母親から注意をつける。

大善・ももり「はい」

二人は急いで朝食を食べて学校に行く準備をしている。

ももり「じゃあ行ってきますー！！」

大善「おばさん行ってきます！！夜ご飯も期待してます！！」

ももり「あんたってご飯の事しか頭にないやけ！？」

大善「食は『人を良くする』って書くからな。すなわち『ご飯を…
ももり』ぶん。」

そんな騒々しい朝を迎えて今日から学園生活を送る二人である。

1 限目：城聖三ツ星学園

二人は新しい学校について話ながら歩いている。

大善「でもよく二人ともあの学校に受かったよな。家から近いから受けてみたけどさ」

ももり「私はともかく、大ちゃんは頭悪いしね！！先生からは止めとけって言われてたしね。」

大善「うっせーな！！ここを受けるって決めてから1日8時間勉強してたんだぞ！！勉強しすぎて逆に頭悪くなるかと思っただぜ」

ももり「そういえば、あの子と同じ学校だったよな。」

大善「うるさいんだよなあいつは…」

そんな話をしてたら横道から人が出てきた

「おはよ〜大善君！！今日もカッコいいね。私惚れ直しちゃったよ。」

…で、横にいるどなが存じ上げませんが全然知らない人おはようございます。」

目の前にセミロング茶髪パーマのいかにも今時な女の子が現れた。制服は大善、ももりと一緒にみたいだ。

大善「ああ…おはよ。」

ももり「現川さん、おはよ！！中学も一緒だったのにもうお忘れになられて？それともまだ春休みボケなのかしら？」

うつつかわふたえ
現川二重

中学2年のときに大善とももりと一緒に中学に転向してきて大善に一目惚れ。それ以来、大善につきまとうようになり、ももりとの仲は悪くなった。ちなみに、2年間で大善に計3回フラれている。

二重「ほんと嫌みなやつなんだから。なんでこんなやつが大善君の隣にいつもいるのかしら？」

ももり「別にいつも隣にいるわけじゃないけど、大ちゃんと私は小さいときからずっと一緒だったの！！何をそんな羨ましかってるのかしら？」

そんな女子の口喧嘩を横をに大善はそそくさと先へ進もうとする。

二重「大善君待って！！学校で部活は何に入るか決めてるの？私は大善君と同じ部活に入るから！！」

大善は少し考えてから言った

大善「ほら、オレって『運動神経』ないじゃん。だからといって文化部に入って適当にやりたくないから帰宅部にするわ」

ももり「…」

二重「そうなんだ。そしたら私も帰宅部にしようかしら。」

ももり「バレーで全国までいったあなたが帰宅部でいいわけ？」

二重「別に『特待』で入っているわけじゃないからいいのよ。高校では私のやりたいようにするわ」

大善「もつすぐ着くぜ。学校着いたらまず自分が何組が見ないとない!!」

3人の目の前に 城聖三ツ星学園が見えてきた。

ももり「今日から新しい学生ライフ楽しもう!!」

大善「よっしゃ行くぜ!!」

そして3人は校門をくぐっていった。

2 限目・学校生活の始まり

昼休み

大善「入学式かったるかっただな。もうちょっと短めにやってくれな
いかな？」

ももり「何言ってるのよ！！大ちゃんほとんど寝てたじゃん！！先
生に目つけられてもしらないんだからね。」

大善「どうぞ『この髪』でいつも色々言われるんだから別にいいよ。
もう慣れたもんだしな！！！」

ももり「だからと言って居眠りはよくないんだからね！！！」

大善「それにしても、ももりも俺もA組とはな。なかなか腐れ縁だ
よな！！！」

ももり「一緒のクラスだね！！嬉しい？」

大善「テストの時はよろしくな！！！」

ももり「ごまかすな!!」

二人が談笑しながら歩いていると前から上級生らしき男4人が大善のほうをジロジロ見ながらやってきた

「おいおい。ピカピカの1年生が生意気にも銀色の髪とはな。あんま目立ちすぎじゃねーのか? ああ!?!」

「あんまり目立ち過ぎるから先輩が可愛がってあげたくなるよな!!」

大善の銀色の髪を気に入らなかつた上級生が絡んできた。

大善「すみません先輩方。確かに目立つちゃいますけどこれ地毛なので勘弁してもらえますか? 行こうぜ、ももり」

大善がももりの手をひいて行こうとすると背中に痛みが走った。どうやら蹴られたようだ。

「女の前だからってあんまカッコつけてんじゃねーぞー!!生意気1年が!!」

大善は立ち上がりながら言う。

大善「先輩方、先にやったのはそっちですからね。」

言い終わるやいなや、大善を蹴り飛ばした上級生が逆に大善に蹴りとばされた。

「おい!!大丈夫か!?くそつ、1年がなめんなよ!!」

残る3人が一斉に大善に飛びかかる。

大善「はあ、オレ、運動神経、ないからあんま動くの得意じゃないんだけどな。ももり!!あれお願い!!」

ももり「あんまやり過ぎたらダメだからね!!」

上級生一人の右ストレートが大善に向かっている

ももり「左!!」

上級生の拳は空をきつた

「???外した!?!」

なおも大善への攻撃は止まらない

ももり「右、すこし下がって、今度は左ね」

大善「あいよ」

大善への攻撃はほとんど、いや、まったくといっていいほど当たらない。

「はあ、はあ。どうなってんだよ、こっちは3人だぜ!!まったく攻撃が当たらない!?!」

「あいつは化物かよ!？」

大善「ん？先輩方もう終わりですか？なら。」

大善の蹴りでまたたくまに3人とも吹っ飛ぶ。

大善「運動神経がないんで、同じことを同時にできないもんでね。」

大善が言い終わるとももりが言う。

ももり「大ちゃん!!やり過ぎないでっつたでしょ!!しかも
上級生相手に!!問題になっても知らないからね!!」

大善「でも最初にやってきたのアイツらだぜ!?見ろ、オレのこの
新しい制服の背中を!!靴の後ついてるし!!しかもサイズ27ぐ
らいだし。」

ももり「うるさい!!しかもサイズ関係ないでしょ!!」

大善「はい…」

やられ上級生「いてて…お前絶対許さないからな。いまに見てるよ、佐々君がお前の事を目つけたらおしまいだからな」

大善「サザエ君？いや、サザエさんでしょ！！とにかくもう俺らに関わらないでください！！」

「ももり、行こうぜ」

大善はももりの手をひいてそそくさと去っていく。

そんな光景を1年D組の窓から見てる男が一人いた。

「あいつ名前なんていうんだろ？てかあの女の子…二人とも気になるな。この学校に楽しみができたな。」

そっぴいと男はニヤニヤしながら教室を出ていく。

3 限目：暗雲

放課後

大善「初日からこんなんじゃないやオレの学園ライフ台無しだぜ。普通の生活がしたいよ。」

ももり「今からは大人しくしときましようね。大ちゃんはただでさえ目立つんだから!!」

大善「いつそのこと、逆に、染めちまおうかな!？」

二人は帰るため廊下をトボトボ歩きながら話している

そしたら目の前に大荷物を抱えた男がおぼつかない足取りで歩いてきた。

大善「あれ大変そうじゃね?」

ももり「大ちゃんは何言わないけど、そういうところは優し…
つて!!もう行ってるし!!」

大善は男に近づきながら話した。

大善「手伝いましょうか？」

男

「!?!」

「まじ!?!助かるわ。もしかして1年生!?!いや、最近の若い子はそういう事がある出来ないと聞いたけど、中には君みたいな親切な子もいるんだね!?!人は見かけによらずってまさにこういうことか。あつ!?!別に君の見た目が不良っぽいとかそういう訳じゃないからね!?!例えの話しね例えの!?!俺さ、これを部室まで持っていかなくちゃいけないわけ。だから半分持ってもらおうかな。君の彼女に持たせたら、せつかくの君の好意だし、君の気がひけるだろうからね。じゃあよろしく!?!」

大善

(初対面なのに何この馴れ馴れしさ!?!?)

「じゃあ持ちますね。どこの部室ですか？」

男「柔道部の部室までよろしくね1年生君。」

大善「!?!」

男「ふふ。まあ、君が驚くのも無理ないかな。普通、柔道っていつたらガツチリした男がやってると思うもんね!?!」

そう大善が驚くのも無理はない。その男、身長こそ高いものの、かなりの細身である。ルックスも良く、まさにモデルみたいに見えただろう。

ももり「柔道部なんですね!?!この柔道部って確か去年全国大会出場してましたよね?」

男「ああ、そうだね!?!なんせここの柔道部は今年に特待で入ってきたやつも含めて1年から3年まで層があついしね。なかなかの強豪高だよ。」

大善「先輩は何年つすか?2年?」

男「僕は2年だね!?!去年までは君らと一緒にピカピカの1年だったよ!?!」

男は笑いながら言ってるが、大善とももりは心の中で「当たり前！
！」とツツコンでいた。

男「ああ、ここだよ！！ありがとうね。所で名前はなんて言つの？」

大善「女ノ都大善です！！」

ももり「百津ももりです！！」

男「大善君と、ももちゃん、ね！！わかった。僕はこの恩は決して
忘れないよ！！」

ももり「いやだノノ先輩！！ももちゃんだなんて！！」

大善の臉がピクッと動いたのを見て男はいやいやとももりをなだめ
てる。

大善「あのくラブラブモード中すみませんが先輩の名前はなんて言
うんですか！？」

大きな、はつきりとした口調で大善が喋った。

男「ああ、僕！？名前は佐々サクマ（さざさくま）ちなみに柔道部のキャプテンね！！」

大善・もり「！？」

サクマ「そんなビックリしないでしょ！！俺って結構柔道強いんだよ。しかも、ここの学校って実力主義だしね」

「そうそう、この荷物半分って言っても相当重いはずなんだけど、それを顔色ひとつ変えずに持ってきてくれた大善君！！」

大善「はい？」

サクマ「よかったら柔道部に入らないかい？僕が言えば君を特待枠に変更することだって可能さ。」

大善「ははは！！先輩冗談を。オレを過大評価しすぎですよ！！しかも、俺って‘運動神経’ないんです。」

サクマ「オレの目には狂いはないんだけどな…まあ、いいや、気が向いたらいつでも入部してくれ！！なら大善君、ももちゃん、ありがとな。オレは部活に行くわ。」

大善・ももり「はい。」

そうして、サクマは部室に、大善とももりは反対側に向かって歩いて行った。

サクマ「女ノ都大善…」

サクマが考え事をしていると、遠くのほうから男4人が近づいてきた。

へたれ上級生「佐々君ここにいたんすか！？探しましたよ！！」

サクマ「柔道部が柔道部の部室にいるのは当たり前だろ。てか何か

用か？」

へたれ上級生「1年に生意気なやつがいましてね！！そいつが…」

サクマ「どうせお前らがまた先に仕掛けたんだろ！！いちいちオレに言ってくるなよ！！」

サクマは少しキレ気味で喋った。

へたれ上級生「でもあいつは佐々君が好きな『強いやつ』に部類に入りますよ？」

へたれ上級生がそういうとサクマの目が輝いた。

サクマ「ほんとか！？『あいつ』と同じくらいはありそうか！？」

へたれ上級生「はい！！なんせオレら3人の攻撃がまったく当たらず、強いてはみんな蹴りいっばつでやられましたからね！！」

いかにも自分が勝ったかのように負けたことを自身満々に話すへたれ上級生×4人
しかしサクマの目はさらに輝く。

サクマ「そうかそうか。で、どんなやつか？」

へたれ上級生「はい、それが…名前はわかってないんですけど、髪の色が銀色です。」

サクマ「!?!」

「なるほど…あいつか。やっぱりオレの目に狂いはないじゃん。ふふ。近々挨拶に行こうかな。」

へたれ上級生「さっすが佐々君!!漢ですね!!」

サクマ「それはそうとして、お前らはあまりに情けなさ過ぎるから、今日は特別に柔道部にしてやるよ。」

へたれ上級生×4人「!?!?!?!?!?!?!」

サクマ「さあ、行くところか!!」

へたれ上級生「いやあああああああ……」

そういつとサクマとへたれ上級生は柔道部の部室に消えていった。

一方

大善「なにお前ニヤニヤしてんだよ?」

大善がふてくされながら言う。

ももり「だって先輩ちよーカッコよかったし、それに……ももちゃん、ってノノ私、小さいときからあだ名になるなら桃太郎とかおしり姫とかだったから。」

ももりはニコニコしながら話している。

大善「じゃあ、ももちゃん、家に帰ろうか!」

ももり「大ちゃんのはワザとらしいから嫌!」

そこで一時口論タイムが始まる。

ももり「てかさ、あの佐々って言う人…」

大善「カツコいってか?ああ、そりやそうだろ!!オレみたいにボサボサ頭の銀髪野郎じゃないからね!!」

ももり「違うわよ!!あの昼に絡んできた上級生いたでしょ?」
「あの人達が最後に、佐々君、がどうかこうとか…言ってなかった?」

大善「ありゃ?そんなこと言ってたかな?でもあんな良い人があんな

なやつらとつるむかよ
「

ももり「うん…考えすぎかな。」

大善「よし！！そうと決まったら早く家に帰って飯食おうぜ！！」

ももり「大ちゃんほんとご飯の事ばかり！！」

大善「食は人をよ…」
ももり「ふん。」

こうして二人の学校生活は始まった。

4 限目：D組のブラッドハンター

次の日の学校。

今日から本格的な授業が始まり、その他部活動、委員会なども行動に移しはじめだす。

大善「なぜ、授業のときの1分は果てしなく、まさに永遠のように感じるんだろうか!？」

机の上でぐったりしながら大善がつぶやく。

ももり「それは大ちゃんが授業に集中してないからだよ。少しは真面目にやったらいいかしら？」

大善「オレはちょー真面目だからな!！」

「大善君はいつでも素敵よ／＼」

ももりが嫌な顔しながら声のしたほうを見ると、クラスがB組になった現川二重がいた。

ももり「あら、余所者がこのクラスになんの用かしら？」

二重「私があるのはクラスじゃなくて大善君！なんで私達、離ればなれになってしまったんでしょうね！？私、とても悲しいわ。」

と言いながら泣き真似をしだす二重

さらに嫌そうなももり。

ぼけーつと外を眺める大善。

二重「そっいえば大善君、D組の‘ブラッドハンター’の事はしってる？」

大善「ブラジャーパンティー？」

言った直後にももりから爽快に頭をたたかれる大善。

大善「いや、知らないけど。そのブラッドハンターって何？」

大善が聞いたあと、二重が一旦落ち着いてから喋りだした。

二重「日宇辰之助。通称ブラッドハンター（血の狩人）狙った獲物はどこまでもおいかけて仕留める。そして最後には相手かえり血で赤く染まっていることからブラッドハンターって呼ばれるようになったらしいの。」

ももり「とんだ変態じゃない！！でも大ちゃんもあんま変わんないかもね！！」

大善「なんで俺がツ…心当たりがないと言えば嘘にはなるけど。」

二重「続けていいかしら？」

二人は頷く。

二重「そいつが今この学校の1年D組らしいの。今日B組で話題になってたから、一応大善君にも話しようと思って。」

ももり「ただ大ちゃんに会いたいだけの口実でしょ!？」

二重「うるさいわね!!あんたがB組だったらよかったのに!!」

ももり「もうチャイム鳴ってますよ早く自分のクラスに戻ってくださーい!」

二重「くっ!!なら大善君、また後で来ますわね。」

大善「おう!!」

そうして二重は自分の教室に帰っていった。

ももり「ほんとにブラッドハンターなんてやついるのかしら?..ねえ?大ちゃん。」

大善「いるなら関わりたくねーや。」

ももり「でも大ちゃんって昔からゴツイ男にモテモテだったからね。」

ももりは笑いながら言った。

大善「せっかくなら胸が大きい大人なお姉さんからモテモテだったらよかったのに。」

言い終わった直後、爽快に頭を叩かれたのち、先生が教室に入ってきた。

放課後

大善「あの瀬戸のやろっ！俺がちよっと居眠りしたからって頭ひっぱたきやがって！！今度ドアに黒板消し挟んどいてやろっかな！」

ももり「下らないこと考えないで授業を真面目に受けなさい。」

まるで母親のいう口調で大善に説教するももり。大善はハイハイ言っている。

「ねえねえ君、女ノ都大善君？」

突如、小柄な顔立ちは中性的な男が大善に話しかけてきた。

大善「ん？オレが女ノ都大善だけど、どうか…ももり「左に避けて
！！！！！」

その声と同時に大善がとっさに左に避けると、何か丸い物体のようなものが高速で大善の隣をかすめていった。

「あれれ？あれを避けちゃうんだ。やっぱり君も、百津ももりさんも何かあるね。」

大善「お前いきなり何すんだよ！！俺だったから避けられたものを他の人だったら直撃コースだぞ！！バカか！？バカなのか！？」

ももり（大ちゃん何気なく自分すごいですアピールしてるんですけど。）

「いやいや、当てるつもりで攻撃したんだけどな。」

「次は外さないよ！！って言いたいけど今日はここまで。代わりに僕の今日できた子分達が相手なるから。」

すると後ろから5人ほど男が出てきた。

大善「ふざけんな！！今日はオレの好きなドラマの再放送があるから見なきゃいけねーんだよ！！相手してられっか！！」

そんな大善の言葉虚しく男達は大善に飛びかかる。

ももり「大ちゃん！！あんまり過ぎたらダメだからね！！そのまま右、後ろ……」

大善が見事に攻撃をかわしていく。

（ふうん。百津さんの合図を信頼して完全に合わせてる感じだね。しかも無駄な動きがない。どれも最短最適なかわしかたか。）

そうこうしているうちに大善の蹴りで5人も吹っ飛ぶ。

大善「子分？達はこんなになってるのに大将のお前は高みの見物かよ……」

「いやいや、その子らはずいぶん良い働きをしてくれたよ。後で彼らには『波佐見バーガー』のミラクルバーガーを奢ってあげるよ。」

冷静に、そして冷たくそう言い放つとさっさと帰ろうとする。

大善「ちょっと待て！！お前名前なんて言うんだよ！！なんでオレらにこんな因縁ぶっかけてきてんだよ！！」

「一気に二つの質問とかダルいな。まあいいや。名前は日宇辰之助ひつたつのすけ。昨日君のバトルを偶然教室から見ちゃってね。良い獲物が見つかったと思ったよ。これからよろしくな女ノ都君。」

ももり（こいつがあの特徴最悪二重人格女がいったブラッドハンター！？）

大善「お前がブラッドハンターって呼ばれてるやつか？」

辰之助「ああ、そつだよ。噂を聞いているなら覚悟はしといてよね。」

ニヤリとした表情で日宇辰之助が言う。

大善「お前こそ覚えとけよ…。」

辺りに緊迫した空気が流れる。

大善「いつ来ても、この銀狼の王子様が返り討ちにしてやる!!」

ももり「ぷっ!!アハハはは。大ちゃんネーミングセンスなさすぎ
!!」

大善「何!？」

辰之助「ふっ」
「覚えとくよ王子様。」

そついうと日宇辰之助は帰って行ってしまった。

大善「ちよつと!!そこチヨイスするのやめてー!!」

大善の声は虚しく放課後の校舎にこだました。

ももり「ブラッドハンターって意外と私のイメージと違ったんだけど。」

真剣な顔になった大善が答える。

大善「見た目はああかもしれないけど、あいつそうとっつきできるやつだな。」

そういう大善の頬からは血が流れている。

ももり「嘘！？最初のやつ当たったの!？」

大善「ももりがいて、なおかつ、かすった程度でこれだからな。あいつはやばいぞ。」

ももりが申し訳なさそうに見ている。

大善「ももりのせいじゃないって！！こんくらい、睡でもつけときや治るよ！！」

ももり「あんま無理しないでね…」

大善「…おう。」

そうして、二人は帰り道を歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1968y/>

大善全集

2011年11月5日03時03分発行